
電腦戀愛

やさいとぶどう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電腦恋愛

【著者】

Z2559F

【あらすじ】 ややことぶぎわ

15歳で、夏だった。高校生のときにもりくんがネットのなかの少女に恋をしていました

序章～第一章（前書き）

「」のお話は、連載作品です。話のつづきが終わるまで考へつかないの
で、続編できるかどうか、ぼくにもまだかじや「」せりません。

・・・のはずが完結しました。「終章」をクリックすればまとめて
全部読めるので、「」から読む必要はありません。時間の無駄にな
るので注意してくださることね。

序章～第一章

電腦恋愛

～序章～

きれいだなあ・・・。

火照るよひにわがしこ^{空氣}や、こつまでもつづく蝉の合唱が
ぼくらの小さな世界に満ちていた、あの日のことだ。

左右に屹立した校舎の隙間から見える、青く、壮大なそらを、おお
きな白い雲が

あらわらと輝きながらゆくつと散歩していた。

ぼくは君とよりそいながら、ふたり純白のアオの世界をみあげてい
る。

ぼくが小さくつぶやくと、それにこたえるよひに、わたしはこころ
いるよと

教えるよひに、君は優しく、こわつた手のひらをつよくした。

風にカーテンがゆれる教室の窓は、どいまでも元気な太陽にひらさ
れてまぶしく反射し、

ふたりはむじやきにほほえみながら、皿を細める。

全てに絶望しながらも

確かに希望と、未来を見上げていた15の夏に・・・

ぼくは、君とあった。

わざと、

ぼくへはじめて会つたんだ。

そつだい？・・・？

～第一章～はじめの会図

> 1 <

ぼくは、恋をした。

たとえば・・・あのとわ。

中学を卒業し、特になんの夢も持たず、地元の高校に入学した、その年の春のことだった。

高校の入学式。その日は桜が咲き誇るどんづらか、空はずつしりとした暗黒の雲におおわれ、

いやでも耳にこびりついてくる不快な雨音が、びっしりと新入生が整列した体育館に響いていた。

辺りは見知らぬ人間で埋め尽くされている。そんな中、ぼくは、ひとりの女生徒の姿に、思考を奪われたのだ。

しかし・・・。

恋、などと表現すると、どこかに違和感を感じてしまう。そもそも、ぼくは

恋というものの定義がわからなかつた。現にあの時のひとめぼれも、子どもが飽きたおもちゃをぽいと投げ捨てるよつこ、ひとつきもまたずには消え失せた。

昔からそうだつたのだ。確かに一時は心を揺り動かされているのだ。けれど

それはどこから来ているものなのか、いまいちよくわからない、ひどくもうこゝものだつた。

だから、きっとぼくは魂の髄からひとに惚れ込んだことなど、生涯でただ一度もないに違いない。

結局、そんな冷めたような態度の心を知つてのことなのか、ぼくは一度もだれから告白

というものをされたことがない。もちろん、自分から愛を打ち明けるなどといった

まるでまんがのような行動をとることも絶対にありえないのだ。

けれど、そんなぼくでも恋をした。
確かに、人を愛したのだ。

それは・・・。

きっと、他人から見たら、まるでばかげた、恋などと形容すべきではない感情なのだろう。

たわいのない、まるで遊びのような想い。

しかしそれは、正真正銘ぼくにとつてはじめての、だれかを心の底や、表面や、どこかしこから想いつ、「恋」というものだつたにちがいないんだ。

なぜだか、そう、信じてみたくなつた。

ネットのなかのひとりの少女。薄暗く、どこまでもつづくネットの黒い深海のなかで、彼女と出会つべくして出合つた、あのとき。

ブログのなかのアイドルへの、切なる片思いのはじまりである。

>2<

一週間ほどまえの日のこと、ぼくは食えていた。女性、といつものに対してもぐるぐると腹をならしていた。

それも仕方のないことである。こんなぼくでもお年頃だ。本能的なにかが自分の中心でうごめいているのを感じた。それは、いらっしゃりを伴つてゐようもあるし、ひどく、せつなさを感じるものもあった。

その日、仮病で学校を休んでいたぼくは、お腹頑張つと布団から

はいだし、

食事をとるうともせずにノートパソコンの電源を入れた。

このノートパソコンは小説家の母が以前使っていたおさがりだ。中学生のときに

もらつて以来、ひきこもりがちなぼくの相棒となつていて。

シンプルなフラットフォルムにシルバーのカラーリングだ。そして100キロの衝撃にも

耐えられるといつ、なかなかにすごいやつなのである。

表面をすこし撫で、本体を開き、左下についている電源スイッチをスライドさせると、

スイッチ部分が緑色にひかり

まるで、スター・ウォーズのR2D2のような声をあげながら起動する。

部屋は、カーテンをしめきつているので昼間だといつに薄暗く、機械の起動音だけが、もの寂しげに、小さくがりがりと、ひとりの世界に響いた。ぼくは勉強机に座りながら

画面の光だけをじつと見つめてパソコンが起き上がるのを待つ。

学校も行かずにひとりでこんなことをしてみると、ああ、ぼくにはたぶん何も無いのだなと静かに、ゆづくつと、きづかれてしまふ。

聞き飽きたメロディーが流れるとともにデスクトップの壁紙が表示され、

アイコンが次々と画面に出現し、きれいに整列する。

ぼくは迷うことなくさまざまなアイコンの中から目的の一つを見つけ出し、

ダブルクリックする。するとインターネットエクスプローラーが起

動し、ホームページで

設定してあるGooogleのウェブが瞬時に開く。

そして・・・、

いつも、ここで困惑してしまうのだ。

よどみなく動いていた指先が一瞬とまり、迷う。

なにをしようか。なにをすべきなのだろう。しかし、やめやめ、田
的など無い。いつもの作業。

ひとり部屋でノートパソコンを起動する。それはひとりの淋しさを
紛らわすためのもの

でもあるだろ。身体を動かす意義があるということを証明し、
不安をどこかに押しやろうとする行動であるのかもしない。
しかし、結局のところ、「それだけ」なのである。
だから、ここを呼び覚ますとき・・・、

ぼくはいつも、からっぽだ。

携帯電話の時報が、午後の時をしらせた・・・。

音が、むなしく空氣をふるわせる。

ぼくはせじて、きついてしまったようだ。ナシビツツキもな
ないかい、

いつそ、何も知らなくて良かつた、なによりのこと。

いつもと、同じかよく似た毎日が、幾日、幾月、そして幾年も、
まるで優しく思えるかのように繰り返し、
遠い道のりを超えていつしか、ついにぼくをへぎはじつしまった
んだ。

ぼくはめぐつあつてしまつた。

ぼくは、それとじつかりと見つめあつた。ふるえながら、なおもあがくよつこ

向き合ひ、必死でみあげた。恐怖し、涙するぼく
たかく、たかくそびえた、それを見上げた。それでもぼくは・・・。

でも、やつぱりだめだつた。

・・・わかれの時がきたんだ。

ぼくは、相棒を捨てた。

^ 3 ^

一週間前のあの日、ぼくはおさがりのノートパソコンをわきにかか
えたまま、
家をとびだし、町を疾走した。つめき声を漏らしながら、はしつた。
通行人の主婦などが不審者を見る目つきでぼくをねめつける。
けれどなおもはしつた。いくつかの家角をまがり、住宅地を走り去
る。

つめき声はしだいに叫び声にかわつた。

人にぎやかな商店街を、一直線に駆け抜ける。他人を押しのけつ
きとばし
それでもはしつた。

想像を絶する、「孤独」という恐怖に打ち勝とうとするかのよつこ

だれかに、必死で助けを請つよつに、ぼくは、さけび、疾走した。

人通りの少ない裏道にはいる。両脇には街路樹が覆いかぶさるよつにたち並び
陽の光をさえぎっていた。

カラスが数羽、ぼくを哀れみ、語りかけるよつにひくへじえを響かせて・・・。

突然、前方に自転車があらわれる。猛スピードではしつていたぼくは、とっさにそれをよけるために、盛大にころび、「ぐぐぐ」と吹き飛ぶよつに回転しながら木に激突する。

自転車はぼくを怒鳴りつけと、とまつもせずに、走り去る・・・。

たおれたまま、顔をあげると、相棒は、そこらへんの地面にころげていた。

ひっくりかえったまま、ころげていた。

ふたが、まぬけそうにすこしづかんと開いていた。

お前・・・100キロの衝撃でも耐えられるんだってな・・・。

だから、だいじょうぶなんだろう?

きっと、ぜんぜん平氣で・・・

きっと・・・。

きっと・・・ひとりでも・・・。

なぜなのだろうか。

ぼくはなんだかよくわからないけれども、だれもいない薄闇のみちでひとり

地面にうつぶせになりながら、泣いていた。

相棒は、ぴくりとも動かなかつた。

> 4 <

ぼくが、まだ彼女と出合つていない一週間前のあのひ・・・。

ぼくはおなかが減つて、ぐるぐると腹をならしていた。
おさがりの傷だらけのノートパソコンをわきにかかえたまま、よたよたと歩いていた。

本当は、捨てるつもりだった。裏山について、木のしたに穴を掘つて、埋めてしまつ氣でいたのだ。

そうすれば、きっとなれると思つたんだ。

ぼくはどこにでもいるよつた、じく普通の高校生になりたかった。
戻りたかつたんだ・・・。

けれどなんだか、

その気はきれこわつぱりぼくのなかから消えつせてしまった。

しかし、あれだけ走つたせいか、とてもおなかが減つたので、
とりあえず腹ごしらえをしようとおもつた。帰り道にコンビニによりみちし、泥や傷のついたぼくらを

店員にじろじろ見られながらも、おにぎりを数個とペットボトルの
炭酸飲料を買つ。

誰もいない家に帰り、鍵をかけて自室にたてこもつた。

パソコンを勉強机のうえにおき、夢中で食事をとる。

実際に言葉にはしないけれど、たぶんぼくはとてもありきたりで、
まるで当たり前のよつこ
わかりやすいことにおつきそれを得た。けれどもそれは、どういまだ

も切なくなるほど、必死に、
誰でもなくこのせへを支えようとしてくれる。

ひとりでないために。

だからぼくは、いかるとおもつた。

これからはいけるやー!としっかり口号が叫んでくれた。

でもせっぱり、それはこまいちなせだかわからない。

食事をおえた。息を大きくて息をきだす。

よし・・・まだ腹はぐるぐるとなつてこいるな。

そしてこれから、ぼくは電腦の世界に深く深くもぐり、
つこに、運命の、出来事のときをむかえることになる。

ぼくは、ひきこもつになつたんだ・・・。いやつと笑いながら、こ
の世の神に、
直面してみた。

赤を放つていた夕日が沈み、暗闇がおとずれた。彼がそれを知ることはない。

／第一章／出会い道をはしる

ぼくが彼女と出会ひの日はじまることだ。

・・・・・つづく

序章～第一章（後書き）

このお話をぼくひとりでの初投稿作品でいざれこます。
これからもあたたかく見守つてやつてください。

なるべくがんばつづきを考えます。

あと、第一章投稿したのでみてください。 といつか終章みてくださいね。 念のため。

第一章（前書き）

第一章を投稿するにあたって、序章～第一章を読み返してみました。読み返せませんでした。ぼくは血圧を恥じ、叫びました。こんな小説を人様にみせていたのか・・。そしてまたしじょうこりもなくやつてしまつのです。

第一章

「第一章　出会い系道をはしる

♪1♪

彼女と出会い系、3日ほどおえのことだ。

たとえば世の中の男子諸君は、恋をするに際して、こんな風に悩んだりするものである。
こんなちびでめがねで貧弱なだめだめ人間が、あこがれのあの子とはたして

つりあうのだらうか？いや・・・むりだ。ぼくなんか・・・生きる価値が無い。

・・・まあしかし、

これはまるでぼくのことであるが、こんなように考えるやつも、きっと学校のクラスに1人2人いるはずである。

ともかく、ぼくは悩んでいた。しかしほくの悩む対象は、まったくもつて

情けなくてどうしようもなかつたのだ。

インターネットの世界に没入し、依存し、現実を逃避した結果、ぼくは現実世界の住人ではなくなつていた。肉体のみが電腦世界の入り口に取り残され、

魂は広大な、ネットという漆黒の大地を爆走していた。

魂は一日に数回だけぬけがらに戾り、そのとき

存在する意味があまり見当たらぬ肉の塊は、ぼくになった。

現実形態のぼくの姿容は、ちよこと筆舌しがたいので、なにもいわ
ないでおくれども、

なんとそのゾンビ状態で深夜に、家宅から徒歩1・2分ほどパソコン
ビニに

ふらふらと歩いてゆくもんだから、

ぼくは近所の人たちのちょっとしたうわさになつていた。

しかし、ぼくはそんなことおかましなじだ。なぜなら、ぼくはひき
こもりだ。

この小さな空間を永遠に支配する王なのだ！ぼくはだれにも影響を
うけない！

だれもぼくに危害を加えることは不可能なのだ！

・・・・・

なぜだの？

こいつこいつと叫んでみると、やつぱり、さみしくなる。

胸のあたりが、なんだかとてもなつかしい想いで、満たされそうに・
・・。

いや、大丈夫だ。ぼくはすぐに

ぼくのあるべき場所、ぼくの本当の故郷にトリップだ。

もやがかかった包み込むよつた薄暗い部屋が、いくらかのあたたかみ
を帶びたパソコンが、

そして、ぼくを今が今かと輝きながらまつてゐる電腦の世界が

いつものよつてぼくを、やれしく迎えてくれる。

運命の出会いまであと三日ほどだった。

ぼくは今、友達と楽しくおしゃべりをしている。
いや、今は確かに友達であるかもしれない。しかし、いつかきっと。
・。

風にゆれる長い黒髪、全てを見すゝっているかのような、スッとした
きれながのめ、
雪だるまを彷彿とさせる、透き通った真白の肌・・・。
ぼくはひたすらに彼女を思い描く。
そつ、彼女こそ、ぼくのあこがれの女なのだった。事のさじまいは、
唐突だった。

女性に飢えていたぼくは、手当たり次第に掲示板で画像をあさった。
しかしほくの収集する女性たちは
かなり偏りがあり、それは少々、問題ともとれるべきものだった。
なぜならそれらは、小学生から高校生あたりの
あられもない少女たちであったのだ。

ロリータ・コンプレックス、

つまりはロリコンなのだと云ふことを、自身も痛いほど理解してい
た。

しかし、ぼくは真実を知っている。

ひきこもりやオタクでなくとも、ロリコン男はひじやうじやうじこと
ことを、
自身も、吐きそうになるほど理解しているつもりである。
まあしかし、正味、これはただの余談というか・・・言い訳である

けれど・・・。

だが、許してほし。ぼくはそれほど重症のロココンといつわせではないのであるから。

これが小学生から中学生まで、までは幼稚園児から小学生といつ範囲にまで限定されてしまえば、それは神をも認めたロリコン野郎といつくなるだろ。さすがにぼくも、そこまでいつてしまつてことであつた瞬間に逃げ出すか警察に通報するだらうな。だから軽蔑しないでくれ。

確かにロリコンといつ事実は認めるが、根はどこまでもさわやかに、といひまるでビーチを照らす、南国の太陽のように晴れわたる好青年なのだよ。
おつと少しあちぢだつたかな?
ははは・・・。

などといった内容のおしゃべりを、ぼくは彼女と楽しくしてくる。正直な話、ゆきだるまの彼女とは、かつきあつたばかりである。

出会いた瞬間ひとめぼれしてしまつた彼女に、なんと、出会つた瞬間ぼくがロリコンだといつことがばれてしまつたのだ。しかし、だけど・・・あたのしこなあ・・・ぼくはいま、どうぞきしている・・・。

・・・その約一時間後のことである。

ロリータ画像掲示板であつた彼女は、なんとネカマだつたらし。ぼくはその事実に実際、B-29の爆撃並みの衝撃をうけた。ちなみに言つておくれど、ネカマとは、ネットの中で女性になりきつている男のことである。

ぼくに話しかけてくれた最初の一言、「運命的なものを感じたの」
・・。

最後の最後、ついでに彼は「こんなことを言ってくれた。

おれも口っこんだぜ。セーラー服の中学生専門のなー

・・・よっぽど警察に電話して署まで連行してもらおつと思つたが、
電話で人とはなすのが怖いのでやめておいた。

つまりは、ぼくのあこがれた運命の女は、ただの口っこண野郎だつ
たのだ・・・。

そんなこんなで、ぼくの電腦の住人としての日々は、
ゆるやかに過ぎていった。

この安らぎ、なんの障害もない平坦な日々は

秋の、木々の葉がひやりとした風に吹かれて、ひらひらと舞いながら
地に落ちてゆくように、
身を削られ、その身を殺される、
もうぐ、儚いひとときなのだと知らず。

きみのからだにじっかりと巻いた、あたたかい闇のすきまから、
すこし目を凝らしてみれば、とおくの方には

耐え難い終わりの光がまたたいているとも知らず。
ぼくは、それでも・・・

ただ、生きた。

^3^

ぼくらが出会う、その前夜のことである。

ぼくは、本当にただなんでもなく生きていた。

人が成すべきこと、成し遂げたいと誰もが願うこと、とても大切なそれらを何一つぼくは見つけることは出来ずについた。

それでも、自分の生活にこんな生き方でいいのか、と疑問をわかれたことはおそらく、一度も無かつた。

最近なんだか不思議に思つことがある。ひきこもりになつたばかりの頃は

騒がしくぐるぐるとなつていた腹が、だんだん女性を求めなくなつている気がした。

けれどそんなこと、ぼくの生活には何の関係もない、まるで些細なことだ。

それに、ぼくもだんだんと大人になつてきたじゃないか、と

ぼくは・・ひとり・・笑つた。

ぼくの、ぼくだけの、

ひとと関わるようこびを知らずにて、いつでも理不尽に傷ついてきたことや、

ただひとつだけの命を、今まで必死に支えてきた、ちつぽけなか

らだは、

いつしか切なげにほほ笑みながら・・・

限界を迎えるとしている。

それでも笑う彼らは、

ぼくは、

いままにを想い、生きているのだろうか。

今夜も、ぼくはのんきに、入り組んだインターネットをどんどん制圧していく。

この、まるで異次元や、夢のなかにいたかのよつな一週間で身に付けた

さまざまな技術を最大限にいかし、ぼくはずしりと重い深海を高速で移動する。

今ではすっかり常連になつたさまざまなサイトを訪れ、そこに心地よさげに居座る住人たちに手を振る。

だけど、彼らはけして、ぼくに手を振りかえすことはない。

ぼくはそんな電腦の住人たちになにを思つでもなく、うつろな瞳で再び前を向き、

ゆらゆらと進みはじめる。

前から、だれかがやつてきた。

けれど、

ぼくがその手を振り返すことはなかった。

いまのは誰だろ?。なんだかとても見覚えがあるよつだつたけれど・
・。

暗い漆黒の世界で田をひらす。

すると……。

田の前の暗黒にて、恐ろしい顔をしたゾンビがつづつていた。

ぼくの心臓はあるあるセンチは飛び上がったとおもうのだが、なぜだか、のどからはかすれた声しか漏れてこなかつた。

心臓がもとの位置にすとんと落し下して、数秒たつてからぼくはパソコンの電源が落ちていたことにきずく。

色を失った画面がうつしていたのは、このぼくだ。少しばかりショックキングだが、

やれやれ自分にこれほど驚くとは……と笑おうとしたとき、

とつぜん暗黒をみつめていたはずの田の前が、まつしろになる。

その刹那、ぼくの体がぐらりと揺りびぐ。

ぼくは知つた。

これが、終わりのひかりなのか。ついにぼくは逃つてしまつたんだ。

めぐり合つてしまつた……。

なんの音もしなくなつた。王国のまんなかで、ひきいもじの王様が静かに横たわつてゐる。

彼は、今度は走り出すことをしなかつた。

ごみや衣服の散乱した薄暗い部屋で、
ひかりを放つてゐるものは、

なにもない。

ぼくは、ぴくりとも動かなかつた。

遠くで、朝日が山の向こう側から、またたきはじめていた。

～第三章～ぼくのことと、きみのこと

久しぶりのそらはひたすらに青かつた。
暗いネットの深海から打ち上げられたぼくは、横たわりながら
流れる雲と、青空をみあげていた。

ぼくときみがであった、この日のことです。

•
•
•
•
•

へ
る
く

第一章（後書き）

まだ恋愛が始まつてすらこません。
これただの馬鹿なひつきーの話ぢやないすか。ふざけてんすか。
なんていわずに、第三章も見てくださいね。おねがいします。頼み
ます・・・。

第三章 前編・後編（前書き）

今回は長くなりました。前章からの期間や、内容などです。それそろお話が暴走し始めています。正直言つてタイトルに「恋愛」なんできでかでかと付けなきやよかつたと後悔です。今回もひきこもりくんがんばりますよ。

（第三章）ぼくのことは、きみのこと

「前編」

♪一♪

少年と少女が出会いずっとまえ、遠いむかしのこと……。

ぼくは東京で生まれた。

草花の芽生えが始まり、生命の息吹があたりを潤す、春先の頃だつた。

下町のちいさな病院で、ぼくはおおきな産声をあげた。

ほかのどの子よりもおおきな、生命の喜びを世界に知らせるかのような声だった。

母親のからだが小さかつたため、母は帝王切開でおなかをひらかれぼくはシャバへと、意気揚々と躍り出た。

そのため、生まれたてだというのに、元氣すぎるほどの男の子だった。

いつまでもぶんぶんと腕を振り回していくといつ。

赤ん坊は、母親の子宮から外の世界へと旅立つときには、すさまじい苦しみを味わうのだそうだ。

人生のいちばんはじめに、もしかしたらいちばんおおきいかもしれない壮絶な試練を乗り越えて、ひとは生まれる。それでやつと一人前の、にんげんになれる。

でも、ぼくはそれを知らない。

「この世界の話しみをなにひとつ知らない、
まるまるで、ふにゃふにゃのこころをもつた赤ん坊が、ここにここ
かく生き始めた。

△△△

まだピアノのしたを走れるくらい、ちいさかったあのとき。
もの「こ」ろついた頃から、父親はもうになかった。だいぶ最近にな
るまで、それを不思議におもうことは
なぜだか無かつた。世界中の子どもたちが、ははおやと、ちあけひや
がこることもあるで当たり前のようと思つて
いるのと同じように、ぼくは何も感じることなく、母やとのぼそい
2本のうでがぼくを必死に支え続けるのをぼんやり見つめていた。

小学生時代。

小学生のこころは、楽しかつた。だれかとつまへ話せなくて仲間はず
れにされたこともあつたけれど、
それでもまだ、ぼくは世界の本当の恐怖に気づいてはしなかつた。

学ランを窮屈に着込んでる、中学のこころ。

部活動にはいっていなかつたぼくは
静寂が悲しく耳にひびく一軒家で、遅くに帰つてくる母をひとり待
つた。

この家は祖父の所有物だつた。

しだいに、ひとと話すことのあまり無いぼくは、その術を失くして
いった。

孤独の苦しみに耐えるため、こころを内側に押し潰した。

こつしかばくは、この世界では生きてゆけないのだとしつた。

そして、15回目の春、高校生。

あのとき・・・。一週間前のあのひ、ぼくは一瞬の恐怖におびえた。そこから惨めに逃げ出し、ひととひととの間にあつた大切な、いくつもの光を、すべて捨てた。ははが残していくお金もつきかけていた。なのに、ぼくはひとりになってしまった。

・・・いつしか母は、いなくなっていたんだ。長い年月を生き、世界の数え切れないほどの痛みを知っていたぼくはとても自然にそれを受け入れた。ぼくの、この信じたくないなるほどのひろい世界でたったひとりだけの家族、母さんは

ぼくを捨てたんだ。

だから、ぼくはこれでいいと思った。

ぼくがもしこの世界の、なにもかもを放り捨ててただひとつ宇宙のはじっこだ

ちっぽけに朽ち果てても、悲しむひとはない。

ぼくを想い、じりじりでぽろぽろと涙を落してくれるものは、どこにもない。

どんなに泣き叫びながら探したってない。無いんだ・・・。

ぼくは、いつだつひとつぼくだった。

ええと・・・。

これは、さみのこと。

ぼくをここに底から救おうとしてくれた、愛すべき、信ずべきひと。

ぼくが守りたいと、願う彼女。

けれどぼくはさみを知らない。

さみは・・・。さみは一体、

だれなんだ？

さみはこのとき、まだこの世界に存在していなかった。

けれど遠い未来、ぼくがさみと出会つたら、さみは確かにここにいるだろう。

さみは、ぼくとおなじくらいに長い年月を、生きてきた。
さみはぼくと同じようなひと。同じ場所にいる。
だから、さみとぼくはいつも。おんなじなんだよ。
とてもやせしこ声で・・・。

それから以前のことは、ぼくはなにも知らない。

そしてあの日。久しぶりの彼らはひたすらに青かった。

暗いネットの深海から打ち上げられたぼくは、横たわりながら

ー・・・。

～第三章～ぼくのじとと・きみのじと

「本編（後編）」

^ ^ ^

流れる雲と、青空をみあげていた。

ぼくときみがであつた、この日のじとです。

意識を取り戻したぼくが存在していた場所は白く、清浄な世界だった。

開け放つた窓からむらむらとじろがつてくる風が、心地いい。空気が輝くみどりを含んでこるのがわかる。

そのちいさな四角から、巨大な雲と空がのつやつと、すべりこじ見えた。

そのおおそれとに恐怖して、のみこまれなこよつけぼくはふわりと目を閉じる。すると光が閉ざされた。

おなじ暗闇がえんえんと満ちていた、あの部屋でのじとが、ぼくの脳内で静寂の音をともなつて再生される・・・。

昨夜、極度のひきこもり生活の末にぼくのからだは限界をむかえた。

ぼくは凄まじいだるさに襲われていた。

頭蓋のなかは鬱鬱とした闇もやにつつまれてこるもので、なにも言葉を生もうとしない。

このからだは絶望的な何かにつらつらと支配されているのではない
かという気がして、

ぼくはそれに必死で抵抗してみる。

すると突然、目の前がぐにやりと歪むのがみえた。

そしてぼくは意識をうしなうその場に倒れこむ。。。

それからぼくは、電気代の集金にきた男に発見され、ここに運ばれ
たそうだ。

玄関のドアは開いていて、部屋の扉の鍵穴からぼくの姿がうかがえ
たらしい。

ぼくはこま、町の病院にいる。

^2^

きみとぼくが出会つはずの、今日。

どこか偉そうで、患者を天下にみているような医者がいう。
もうすこし発見が遅れていれば危なかつたのだよ。きみはいつたい
何をしていたら

こんな状態になるんだね。

まったくもつてやる氣の無い声で、何の意味もない説教を垂れ流す。

ぼくはとくに聞いていなかつた。せかせかと、音声を耳の穴から
もう片方の耳穴へと通りぬけながら、おもつた。

こうこう奴がうじゅうじゅういるからこの世界がいやになるんだな・・

。

しかし、ぼくはもうこのただっぴりい世の中に着の身着のまま放り込まれてしまった。王国は崩壊し、信頼する相棒とも別れてしまったのだ。やつはまだあの部屋にぼつんと残っているのだろうか。

ちいさな希望と、絶望の残骸に埋もれながら・・・。

夜になつた。

ひんやりとした空気があたりを静かに包み込み、落ちついた紺色の空には、遠い宇宙の彼方に回りながら巨大に浮かぶ、ぴかぴかした惑星や、衛星たちが今夜もぼくらにその美しく、幻想的な姿をお披露目している。

ぼくは病院のベッドの中で夜空を見つめていた。医者の薬を断片的に思い出してみるとどうやら、ぼくは入院することになったようだつた。

なんだかじつとしてここに苛つきを感じた。なんだう。なんだか妙な胸騒ぎを感じる。ダメだ。ここに居てはダメだ。わあわあと本能が騒ぎ立てる。すると、ぼくはすこしおかしいことを思いついた。それは、いくぶん狂つていたとも思える。

ぼくはベッドの中から出で、病人たちの寝静まつた病院の閑散とした廊下を歩く。音を立てないよつ、ちいさくゆづくと移動した。夜の病院というのは、ときには恐怖すら感じさせた。息づかいすらも、漆黒の回廊のむすびまで響いていた。やっぱり、やめようかと思った。

と理性さんが心のなかでいつてみるとまた、本能くんのブーリング

である。

廊下のまがりかどでいつたんとまり、視覚と聴覚の入力ポートの感度を最大にする。

病院にもやつぱり見回りとかあるもんなのだろうか？けれどもぼくのセンサーはなにも拾わなかつたようなので、右折して進む。そして、表の道路に面した窓を見つけた。

窓の前に立つと鍵をあけ、ぼくは枠に腕をかけてなんとか乗り越える。そとの地面にじたりと着地したとたん、猛然と走り出す。

ぼくは、病院を脱走してみた。

^ 3 ^

きみと出会い、月夜の晩。

ぼくは途方にくれていた。いまさらになつて氣づいてしまつたのだが、

ぼくはあの病院が、町のいつたいどの位置にあつたのか知らない。いや、もしかすると隣町の病院だつたりするんじゃないのだろうか。気を失つたまま運ばれたのだから、わかるわけない。無我夢中で駆けた為にここがどこなのかもわからなくなっていた。

病院に戻ることすら出来ない。

ぴいんと張り詰めた冷たさがぼくを冷静にさせると、からだの奥の方から

轟々と音を響かせながら、恐怖の烈火がせりあがつてきた。

こうなつてしまえば、もうあまり時間は残されていなかつた。

恐怖がぼくをじりじり焦がし始めているのがわかる。このまま焼き尽くされてしまえば、

ぼくは恐怖に耐えられず、パニックに陥つてしまつはずだった。

樂観的な状況ではなかつた。

日本トップレベル、

つまり世界トップレベルのひきこもり生活によつて、ぼくの運動能力や、体力などといったものは極限まで削減され、そういうばさつきからなんだか

ふらふらするし、少し氣を抜いたら嘔吐して

黒い地面にうずくまつてしまいそうなのだ。入院患者がタイム更新目指して全力疾走するべきではないといつゝことが判明した。しかし、そんのは許されなかつた。

こんな状態のまま野外で一晩明かしたら、ぼくは死んでしまう・・・。

全身からどくどく流れ落ちる脂汗が炎を激しくさせながら、ぼくは意識をはつきりと

させていなかつたが、それだけは確かに理解できた。

ぼやけた景色をみまわしてみたが、光が灯つてゐる建物はあらずもう深夜なのでしつかり戸締りがしてあるようだつた。

息が上がつてゐる。きもち悪い。暗黒の景色が数秒に一度、くらりとぶれる。

なにかにすがるように、闇の向こう側まで目線を馳せながらよろくぐらりと進んだ。

つらかつた。泣き出してしまつた。

だけど、ぼくを誰も助けることは出来ない。まわりには人つ子一人居なかつた。

黄金色の月が、いつもと変わらずゆつたりとぼくの頭上に浮かんでいた。

彼はなぜ、いつまでもぼくを助けることをしないのだ？

そつか、とぼくはあはは、とよれた笑い声をたてる。

[冥界の死の使いに、金色に輝きながらぼくがここにいると知りせているのか……。]

ちくしょうめ……へやし……ぼくは死ぬのか？

だれも助けてくれない。ぼくは……。

ぼくは、こいつのことばを思い出す。

”ぼくはひとりなんだ”

それはひとりらの、ちこさな、忘れかけられていた言の葉だつた。すると、どこからか優しく吹いた電腦の風が、ふわりとぼくを取り巻く。

強い意志をもつた風が、葉をのせて、ひらひらと舞い踊りながらぼくのひつぽけながらだの全てを、あたたかい黒で包み込みながらひゅるひゅるりと幾度も駆け、巡った。

それらは、遠くとおい遙か彼方かなたからやってきた、ぼくにとって大切なものたちだった。

ぼくは思い出した。あの日々を。そうだ、ぼくはこいつだつてひとりだつたじゃないか。

今回だつて、いつもと同じだ。なにも変わらない。ぼくの漆黒の力が、赤の炎を飲みこみながら恐怖を消し飛ばした。

戦える……！ぼくのこいつも爆発するようにふくらんで、みなぎつた。

ぼくは孤独とたたかう戦士だ。孤独の戦士。

電腦の、戦士だ。

・・・めざすは、没落の王国。ちいさな世界のなかの王さまは、いまむくりと立ち上がった。

少年の、最後の戦いがはじまる。

少年の背後で刃がうなずくように、きらつと輝いた。

～第4章～ 戦いのはてに

・・・・・つづく

第三章 前編・後編（後書き）

それについても・・・テスト終わりましたよ・・・。」何日か勉強しなきやつていう嫌な感じのプレッシャーで好きなこととか勉強とか小説の更新とか勉強ができなかつたので、今日から趣味にいそしします。テストからの逃避ではじめた小説ですが、これからも、どうか末永く、願わくば完結できますように・・・よろしくお願ひいたします。

終章 「短編・電腦恋愛」（前書き）

いい加減終わらせさせたくなつたので今までのを全部まとめて多少いじつて終わらせました。僕の人生初の小説、電腦恋愛完結です。

きれいだなあ · · · · ·

火照るようににさわがしい空氣や、いつまでもつづく蝉の合唱がぼくらの小さな世界に満ちていた、あの日のことだ。

左右に屹立した校舎の隙間から見える、青く、壮大なそらを、おおきな白い雲がきらきらと輝きながらゆっくりと散歩していた。ぼくは君とよりそいながら、ふたり純白のアオの世界をみあげている。ぼくが小さくつぶやくと、それにこたえるように、わたしはここにいるよと教えるように、君は優しく、にぎった手のひらをつよくした。風にカーテンがゆれる教室の窓は、どこまでも元気な太陽にてらされてまぶしく反射し、ふたりはむじやきにほほえみながら、目を細める。

全てに絶望しながらも確かに希望と、未来を見上げていた15の

夏に・・・・・ぼくは、君とであった。
きっと、ぼくは君だったんだ。

ぼくは、恋をした。

たとえば・・・あのとき。中学を卒業し、特になんの夢も持たず
に地元の高校に入学した、その年の春のことだった。

高校の入学式。その日は桜が咲き誇るどころか、空はずつしりと
した暗黒の雲におおわれ、いやでも耳にこびりついてくる不快な雨
音が、びつしりと新入生が整列した体育館に響いていた。辺りは見
知らぬ人間で埋め尽くされている。そんな中ぼくは、ひとりの女生
徒の姿に、思考を奪われたのだ。

しかし・・・恋、などと表現すると、どこかに違和を感じてしまふ。そもそも、ぼくは恋というものの定義がわからなかつた。現
にあの時のひとめぼれも、子どもが飽きたおもちゃをぽいと投げ捨
てるよろこび、ひとつきもまたずに消え失せた。昔からそうだったの
だ。確かに一時は心を揺り動かされているのだ。けれどそれはどこ
から来ているものなのか、いまいちよくわからない、ひどくもろい
ものだった。

だから、きっとぼくは魂の體からひとに惚れ込んだことなど、生
涯でただ一度もないに違いない。結局、そんな冷めたような態度の
心を知つてのことなのか、ぼくは一度もだれから告白といつもの

をされたことがない。もちろん、自分から愛を打ち明けるなどといったまるでまんがのような行動をとることも絶対にありえないのだ。

けれど、そんなぼくでも恋をした。確かに、人を愛したのだ。

それは・・・きっと、他人から見たら、まるでばかげた、恋などと形容すべきではない感情なのだろう。たわいのない、まるで遊びのような想い。しかしそれは、正真正銘ぼくにとってははじめての、だれかを心の底や、表面や、どこかしこから想う、「恋」というものだったにちがいないんだ。なぜだか、そう、信じてみたくなった。薄暗く、どこまでもつづくネットの黒い深海のなかで、君と出会いうぐくして出会った、あのときに。切なる片思いのはじまりである。

一週間ほどまえの日のこと、ぼくは飢えていた。女性、というものに対してぐるぐると腹をならしていた。それも仕方のないことである。こんなぼくでもお年頃だ。本能的ななかが自分の中心でうごめいているのを感じた。それは、いらつきを伴っているようでもあるし、ひどく、せつなさを感じるものようでもあった。

その日、仮病で学校を休んでいたぼくは、お昼頃にやっと布団からはいだし、食事をとろうともせずにノートパソコンの電源を入れた。このノートパソコンは小説家の母が以前使っていたおさがりだ。中学生のときにもらつて以来、ひきこもりがちなぼくの相棒となっている。シンプルなフラットフォルムにシルバーのカラーリングだ。そして100キロの衝撃にも耐えられるという、なかなかにすごいやつなのである。

表面をすこし撫で、本体を開き、左下についている電源スイッチをスライドさせると、スイッチ部分が緑色にひかりまるで、スター・ウォーズのR2D2のような声をあげながら起動する。部屋は、スター・テンをしめきつているので昼間だというに薄暗く、機械の起動音だけが、もの寂しげに、小さくがりがりと、ひとりの世界に響いた。ぼくは勉強机に座りながら画面の光だけをじっと見つめてパソコン

が起き上がるのを待つ。学校も行かずひとりでこんなことをしていると、ああ、ぼくにはたぶん何も無いのだなと静かに、ゆっくりと、きづかされてしまつ。

聞き飽きたメロディーが流れるとともにデスクトップの壁紙が表示され、アイコンが次々と画面に出現し、きれいに整列する。ぼくは迷うことなくさまざまアイコンの中から目的の一つを見つけ出し、ダブルクリックする。するとインターネットエクスプローラーが起動し、ホームページに設定してあるGoogleのウイングウドウが瞬時に開く。そして・・・・・。

いつも、じりじりと惑つてしまつのだ。よどみなく動いていた指先が一瞬とまり、迷つ。

なにをしようか。なにをすべきなのだらう。しかし、そもそも、目的など無い。いつもの作業。ひとり部屋でノートパソコンを起動する。それはひとりの淋しさを紛らわすためのものでもあるだらう。身体を動かす意義があるといふことを証明し、不安をどこかに押しやろうとする行動であるのかもしれない。しかし、結局のところ、「それだけ」なのである。だから、こいつを呼び覚ますとき・・・・・ぼくはいつも、からつぽだ。

携帯電話の時報が、午後0時をしらせた・・・・・。音が、むなしく空氣をふるわせる。

ぼくはそして、きづいてしまつたようだ。けしてどうしようもないから、いつも、何も知らないくて良かつた、なによりのことを。いつもと、どこかよく似た毎日が、幾日、幾月、そして幾年も、まるで優しく思えるかのように繰り返し、遠い道のりを超えていつしか、ついにぼくにめぐつてきてしまったんだ。ぼくはめぐつあってしまつた。

ぼくは、それとしつかりと見つめあつた。ふるえながら、なおもあがくよろに向き合つて、必死でみあげた。恐怖し、涙するほどたか

く、たかくそびえた、それを見上げた。それでもぼくは……。

でも、やつぱりだめだった。……わかれの時がきたんだ。
ぼくは、相棒を捨てた。

一週間前のあの日、ぼくはおさがりのノートパソコンをわきにかえたまま、家を飛びだし、町を疾走した。うめき声を漏らしながら、はしつた。通行人の主婦などが不審者を見る目つきでぼくをねめつける。けれどなおもはしつた。いくつかの家角をまがり、住宅地を走り去る。うめき声はしだいに叫び声にかわった。人にさきやかな商店街を、一直線に駆け抜ける。他人を押しのけつきとばしそれでもはしつた。

想像を絶する、「孤独」という恐怖に打ち勝とうとするかのように、だれかに、必死で助けを請つように、ぼくは、さけび、疾走した。人通りの少ない裏道にはいる。両脇には街路樹が覆いかぶさるようにたち並び陽の光をさえぎっていた。カラスが数羽、ぼくを哀れみ、語りかけるようにひくひくこえを響かせて……。

突然、前方に自転車があらわれる。猛スピードではしつていたぼくは、とっさにそれをよけるために、盛大にころび、じろじろと吹き飛ぶように回転しながら木に激突する。自転車はぼくを怒鳴りつけると、とまりもせずに、走り去る……。

たおれたまま、顔をあげると、相棒は、そこらへんの地面にころげていた。ひっくりかえったまま、ころげていた。ふたが、まぬけそうにすこしほかんと開いていた。

お前……100キロの衝撃でも耐えられるんだってな……。
だから、だいじょうぶなんだろう? きっと、ぜんぜん平氣で……。
きつと……きつと……ひとりでも……。

なぜなのだろうか。ぼくはなんだかよくわからないけれども、だれもいない薄闇のみちでひとり地面にうつぶせになりながら、泣いていた。相棒は、ぴくりとも動かなかつた。

ぼくが、まだ彼女と出会つていらない一週間前のあの日・・・。ぼくはおなかが減つて、ぐるぐると腹をならしていた。おさがりの傷だらけのノートパソコンをわきにかかえたまま、よたよたと歩いていた。

本当は、捨てるつもりだった。裏山について、木のしたに穴を掘つて、埋めてしまつた氣でいたのだ。そうすれば、きっとなれると思つたんだ。ぼくはどこにでもいるような、「ごく普通の高校生になりましたかつた。戻りたかつたんだ・・・。けれどなんだか、その気はきれいさつぱりぼくのなかから消えうせてしまつた。

しかし、あれだけ走つたせいか、とてもおなかが減つたので、とりあえず腹ごしらえをしようともつた。帰り道にコンビニによりみちし、泥や傷のついたぼくらを店員にじろじろ見られながらも、おにぎりを数個とペットボトルの炭酸飲料を買う。誰もいない家に帰り、鍵をかけて自室にたてこもつた。パソコンを勉強机のうえにおき、夢中で食事をとる。

実際に言葉にはしないけれど、たぶんぼくはとてもありきたりで、まるで当たり前のようにわかりやすいことに気づきそれを得た。けれどもそれは、どこまでも切なくなるほど、必死に、誰でもなくこのぼくを支えようとしてくれる。

自分以外の存在があるから強くなれるんだ。お互いが、ひとりでないために。相棒、これからもお前と共に。

だからぼくは、いけるとももつた。これからはいけるぞー!といつかりこころが叫んでくれた。でもやっぱり、それはいまいちなぜだかわからない。食事をおえた。息を大きくはきだす。よし・・・。

・まだ腹はぐるぐるとなつてゐるな。

そしてこれから、ぼくは電腦の世界に深く深くもぐり、ついで、運命の、出会いのときをむかえることになる。ぼくは、ひきこもりになつたんだ……。にやりと笑いながら、この世の神に、宣言してみた。

赤を放つていた夕日が沈み、暗闇がおとずれた。彼がそれを知ることはない。

彼女と出会い、3日ほどまえのことだ。

たとえば世の中の男子諸君は、恋をするに際して、こんな風に悩んだりするものである。こんなちびでめがねで貧弱なだめだめ人間が、あこがれのあの子とはたしてつりあうのだろうか？いや……。むりだ。ぼくなんか……生きる価値が無い。……まあしかし、これはまるでぼくのことであるが、こんなように考えるやつも、きっと学校のクラスに1人2人いるはずである。ともかく、ぼくは悩んでいた。しかしほくの悩む対象は、まったくもつて情けなくてどうしようもなかつたのだ。

インターネットの世界に没入し、依存し、現実を逃避した結果、ぼくは現実世界の住人ではなくなつていた。肉体のみが電腦世界の入り口に取り残され、魂は広大な、ネットという漆黒の大地を爆走していた。魂は一日に数回だけぬけがらに戻り、そのとき存在する意味があまり見当たらぬ肉の塊は、ぼくなつた。現実形態のぼくの容姿は、ちょいと筆舌しがたいので、なにもいわないのでおくけれども、なんとそのゾンビ状態で深夜に、家宅から徒步1・2分ほどのコンビニにふらふらと歩いてゆくものだから、ぼくは近所の人

たちのちょっとしたうわさになっていた。

しかし、ぼくはそんなことおかまいなしだ。なぜなら、ぼくはひきこもりだ。この小さな空間を永遠に支配する王なのだ！ぼくはだれにも影響をうけない！だれもぼくに危害を加えることは不可能なのだ！

・・・・・・・・・・・・

なぜだらう。じつこじつと叫んでみると、やつぱつ、さみしくなる。胸のあたりが、なんだかともなつかしい想いで、満たされそうに・・・。いや、大丈夫さ。ぼくはすぐにぼくのあるべき場所、ぼくの本当の故郷にトリップだ。

もやがかつた包み込むような薄暗い部屋が、いくらかのあたたかみを帶びたパソコンが、そして、ぼくを今か今かと輝きながらまつている電腦の世界がいつものよつとぼくを、やさしく迎えてくれる。

運命の出合いままであと3日ぼくだった。ぼくは今、友達と楽しくおしゃべりをしていく。いや、今は確かに友達であるかもしれない。しかし、いつかきっと・・・・・・

風にゆれる長い黒髪、全てを見すいているかのよつな、スッとしたきれながのめ、雪だるまを彷彿とさせる、透き通った真白の肌・・・・・。ぼくはひたすらに彼女を思い描く。そう、彼女こそ、ぼくのあこがれの女なのだつた。事のはじまりは、唐突だつた。

女性に飢えていたぼくは、手当たり次第に掲示板で画像をあさつた。しかしほくの収集する女性たちはかなり偏りがあり、それは少々、問題ともれるべきものだつた。なぜならそれらは、小学生から高校生あたりのあられもない少女たちであつたのだ。

ロリータ・コンプレックス、つまりはロリコンなのだということを、自身も痛いほど理解していた。しかし、ぼくは眞実を知つてい

る。ひきこもりやオタクでなくとも、ロリコン男はうじゅうじゅういることを、自身も、吐きそうになるほど理解しているつもりである。まあしかし、正味、これはただの余談といつか言い訳であるけれど・・・・・。

だが、許してほしい。ぼくはそれほど重症のロリコンというわけではないのであるから。これが小学生から中学生まで、はては幼稚園児から小学生という範囲にまで限定されてしまえば、それは神を認めさせたロリコン野郎ということになるだらう。さすがにぼくも、そこまでいつてしまつてしまふとであつた瞬間に逃げ出すか警察に通報するだらうな。だから軽蔑しないでくれ。確かにロリコンという事実は認めるが、根はどこまでもさわやかに、こころはまるでビーチを照らす、南国の大太陽のように晴れわたる好青年なのだよ。おつと少しあちぢだつたかな？ははは・・・・・。

などどこかの内容のおしゃべりを、ぼくは彼女と樂しくしている。
正直な話、ゆきだるまの彼女とは、せつときあつたばかりである。
出会いた瞬間ひとめぼれしてしまつた彼女に、なんど、出会つた
瞬間ぼくがロリコンだといふことがばれてしまつたのだ。しかし、
だけど・・・ああたのしこなあ・・・・・・。ぼくはこも、じきじ
きしている・・・。

・ その約一時間後のことである。

ロリーータ画像掲示板であつた彼女は、なんとネカマだつたらし
い。ぼくはその事実に實際、B-29の爆撃並みの衝撃をうけた。
ちなみに言つておくが、ネカマとはネットの中で女性になりきつて
いる男のことである。ぼくに話しかけてくれた最初の一言に、運命
的なものを感じたのに・・・・・。

こんな時間に・・・あなた、ひきこもり？実は、あたしもなのよ。最後の最後、ハーディー彼は「おはい」を言つてゐる。

おれもロリコンだぜ。セーラー服の中学生専門のな！

・・・よつぽど警察に電話して署まで連行してもらおうと思つたが、電話で人とはなすのが怖いのでやめておいた。つまりは、ぼくのあこがれた運命の女は、ただのロリコン野郎だったのだ・・・・・。

そんなような出来事の重なりのうちに、ぼくの電腦の住人としての日々は、ゆるやかに過ぎていった。

この安らげる、なんの障害もない平坦な田々は秋の、木々の葉がひやりとした風に吹かれて、ひらひらと舞いながら地に落ちてゆくように、身を削られ、その身を殺される、もうく、儂にひとときなのだと知らずに。

きみのからだにしつかりと巻いた、あたたかい闇のすきまから、すこし目を凝らしてみれば、とおくの方には耐え難い終わりの光がまたたいているとも知らず。ぼくは、それでも・・・・・・

ただ、生きた。

ぼくらが出会い、その前夜のことである。

ぼくは、本当にただなんでもなく生きていた。人が成すべきこと、成し遂げたいと誰もが願うこと、とても大切なそれらを何一つぼくは見つけることは出来ずにいた。それでも、自分の生活にこんな生き方でいいのか、と疑問をわせたことはおそらく、一度も無かつた。

最近なんだか不思議に思うことがある。ひきこもりになつたばかりの頃は騒がしくぐるぐるとなつっていた腹が、だんだん女性を求めなくなつていい気がした。けれどそんなこと、ぼくの生活には何の関係もない、まるで些細なことだ。それに、ぼくもだんだんと大人になってきたじゃないか、と、ぼくはひとり・・・笑つた。

ぼくの、ぼくだけの、ひとと関わるよろこびを知らずに、いつで

も理不尽に傷ついてきたころや、ただひとつだけの命を、いままで必死に支えてきたあつまけながらだは、いつしか切なげにほほ笑みながら、限界を迎えるとしている。それでも笑う彼らは、ぼくは、いまなにを想い、生きているのだろうか。

今夜も、ぼくはのんきに、入り組んだインターネットをどんどん制圧してゆく。この、まるで異次元や、夢のなかにいたかのような一週間で身に付けたさまざまな技術を最大限にいかし、ぼくはずしりと重い深海を高速で移動する。

今ではすっかり常連になつたさまざまなサイトを訪れ、そこに心地よさげに居座る住人たちに手を振る。だけど、彼らはけして、ぼくに手を振りかえすことはない。ぼくはそんな電腦の住人たちに、にを思うでもなく、うつろな瞳で再び前を向き、ゆらゆらと進みはじめる。前から、だれかがやつてきた。けれど、ぼくがその手を振り返すことにはなかつた。

いまのは誰だろう。なんだかとても見覚えがあるようだつたけれど・・・。暗い漆黒の世界で目をこらす。すると・・・。目の前の暗黒に、恐ろしい顔をしたゾンビがうつっていた。

ぼくの心臓はまるまる2センチは飛び上がつたとおもうのだが、なぜだか、のどからはかすれた声しか漏れてこなかつた。

心臓がもとの位置にすとんと落として、数秒たつてからぼくはパソコンの電源が落ちていたことに気づく。色を失った画面がうつしていたのは、このぼくだ。少しばかりショッキングだが、やれやれ自分にこれほど驚くとは・・・と笑おうとしたとき、とつぜん暗黒をみつめていたはずの目の前が、ちかちかと数回瞬いき、突如真白に染まる。凄まじい嫌悪感におそれ、その刹那ぼくの体が全ての骨をなくしたよつとぐらりと揺らぐ。なにも見えない。ぼくは知つた。

これが、終わりの光なのか。ついにぼくは辿りついてしまつたん

だ。めぐつ合つてしまつた・・・・・。

なんの音もしなくなつた。王国のまんなかで、ひきこもりの王様が静かに横たわつてゐる。彼は、今度は走り出すことをしなかつた。ごみや衣服の散乱した薄暗い部屋で、ひかりを放つてゐるものは、なにもない。

ぼくは、ぴくつとも動かなかつた。

遠くで、朝日が山の向こう側から、またたきはじめていた。

ぼくと君が出会いずっとまえ、遠いむかしのこと・・・・・。

ぼくは東京でうまれた。草花の芽生えが始まり、生命の息吹がありを潤す、春先の頃だつた。下町のちいさな病院で、ぼくはおおきな産声をあげた。ほかのどの子よりもおおきな、生命の喜びを世界に知らせるかのような声だつた。母親のからだが小さかつたため、母は帝王切開でおなかをひらかればぼくはシャバへと、意気揚々と躍り出た。そのため、生まれたてだといつのに、元氣すぎるほどの男の子だつた。いつまでもぶんぶんと腕を振り回していたといつ。

赤ん坊は、母親の子宮から外の世界へと旅立つときには、すさまじい苦しみを味わうのだそうだ。人生のいちばんはじめに、もしかしたらいちばんおおきいかもしぬない壮絶な試練を乗り越えて、ひとは生まれる。それでやつと一人前の、にんげんになれる。

でも、ぼくはそれを知らない。

この世界の苦しみをなにひとつ知らない、まんまるで、ふにゃふにゃのこころをもつた赤ん坊が、ここにちいさく生き始めた。

まだピアノのしたを走れるくらい、ちいさかつたあのとき。

ものじこりついた頃から、父親はもういなかつた。だいぶ最近になるまで、それを不思議におもうことはなぜだか無かつた。世界中

の子供たちが、ははおやと、ひちおやがいる」とまるで当たり前のようになつてゐるのと同じよつて、「ぼくは何も感じることなく、母さんのほそい2本の「う」がぼくを必死に支え続けるのをほんやり見つめていた。

小学生時代。

小学生のころは、楽しかった。だれかとうまく話せなくて仲間はずれにされたこともあつたけれど、それでもまだ、ぼくは世界の本当の恐怖に気づいてはいなかつた。

学ランを窮屈に着込んでいる、中学のころ。

部活動にはいっていなかつたぼくは静寂が悲しく耳にひびく一軒家で、遅くに帰つてくる母をひとり待つた。この家は祖父の所有物だつた。しだいに、ひとと話すことのあまり無いぼくは、その術を失くしていつた。孤独の苦しさに耐えるため、このを内側に押し潰した。

いつしかぼくは、この世界では生きてゆけないのだとじつた。

そして、15回目の春、高校生。

あのとき・・・・・。一週間前のあるひ、ぼくは一瞬の恐怖におびえた。そこから惨めに逃げ出し、ひとつひととの間にあつた大切な、いくつもの光を、すべて捨てた。ははが残していったお金もつきかけていた。なのに、ぼくはひきこもりになつた。

・・・いつしか母は、いなくなつていたんだ。長い年月を生き、世界の数え切れないほどの痛みを知つていたぼくはとても自然にそれを受け入れた。ぼくの、この信じたくないなるほどのひろい世界でたつたひとりだけの家族、母さんはぼくを捨てたんだ。

だから、ぼくはこれでいいと思つた。

ぼくがもしこの世界の、なにもかもを放り捨ててただひとり宇宙のはじつこでちつぽけに朽ち果ても、悲しむひとはいない。ぼくを想い、こころでぼろぼろと涙を落としてくれるものは、どこにもない。どんなに泣き叫びながら探したつてない。無いんだ・・・・・。

ぼくは、いつだつてひとりぼっちだった。

ええと・・・・・。

これは、きみのこと。ぼくをこの底から救おうとしてくれた、愛すべき、信ずべきひと。ぼくが守りたいと、願う彼女。けれどぼくはきみを知らない。きみは・・・・・。きみは一体、だれなんだ？

きみはこのとき、まだこの世界に存在していなかった。けれど遠い未来、ぼくがきみと出逢うとき、きみは確かにこういうだらう。きみは、ぼくとおなじくらい長い長い年月を、生きてきた。きみはぼくと同じよつなひと。同じ場所にいる。だから、きみとぼくはいつもおんなじなんだよ。

とてもやせしこ姫で・・・・・。

それから以前のじとま、ぼくはなにも知らない。

そしてあの日。久しづびりのそらはひたすらに青かつた。暗いネットの深海から打ち上げられたぼくは、横たわりながら流れる雲と、青空をみあげていた。ぼくときみがであった、この日のことです。

意識を取り戻したぼくが存在していた場所は白く、清浄な世界だった。開け放った窓からさらさらとこころがつてくる風が、心地いい。空気が輝くみどりを含んでいるのがわかる。そのちいさな四角から、巨大な雲と空がのつそりと、すぐそこに見えた。そのおおきさに恐怖して、のみこまれないよつことぼくはふわりと目を閉じる。すると光が閉ざされた。

おなじ暗闇がえんえんと満ちていた、あの部屋でのことが、ぼくの脳内で静寂の音をともなつて再生される。

昨夜、極度のひきこもり生活の末にぼくのからだは限界をむかえた。

ぼくは凄まじいだる目に襲われていた。頭蓋のなかは**鬱鬱**とした霧につつまれていて、なにも言葉を生もつとしない。このからだは絶望的な何かにつらつらと支配されているのではないかという気がして、ぼくはそれに必死で抵抗してみる。すると突然、目の前がぐにゃりと歪むのがみえた。そしてぼくは意識をつしないその場に倒れこむ・・・・・。

それからぼくは、新聞代の集金にきた男に発見され、ここに運ばれたそうだ。玄関のドアは開いていて、部屋の扉の鍵穴からぼくの姿がうかがえたらしい。

ぼくはいま、町の病院にいる。

きみとぼくが出会うはずの、今日。

どこか偉そうで、患者を手下にみているような医者がいう。もうすこし発見が遅れていれば危なかつたのだよ。きみはいつたい何をしていたらこんな状態になるんだね。まったくやる気の無い声で、何の意味もない説教を垂れ流す。

ぼくはとくに聞いていなかつた。せかせかと、音声を耳の穴からもう片方の耳穴へと通りぬけながら、おもつた。こうこう奴がうじやうじやいるからこの世界がいやになるんだな・・・・・。しかし、ぼくはもうこのだだつぴろい世の中に着の身着のまま放り込まれてしまつた。王国は崩壊し、信頼する相棒とも別れてしまつたのだ。やつはまだあの部屋にぽつんと残つているのだろうか。ちいさな希望と、絶望の残骸に埋もれながら・・・・・。

夜になつた。

ひんやりとした空氣があたりを静かに包み込み、落ちついた紺色の空には、遠い宇宙の彼方に回りながら巨大に浮かぶ、ぴかぴかした惑星や、衛星たちが今夜もぼくらにその美しく、幻想的な姿をお披露している。

ぼくは病院のベッドの中で夜空を見つめていた。医者の言葉を断

片的に思い出してみるとどうやら、ぼくは入院することになつたようだつた。なんだかじつとしていることに苛つきを感じた。なんだろ？ なんだか妙な胸騒ぎを感じる。ダメだ。ここに居てはダメだ。わあわあと本能が騒ぎ立てる。すると、ぼくはすこしおかしなことを思いついた。それは、いくぶん狂っていたとも思える。

ぼくはベッドの中からはい出し、病人たちの寝静まつた病院の閑散とした廊下を歩く。音を立てないよう、ちいさくゆっくりと移動した。夜の病院というのは、ときに恐怖すら感じさせた。息づかいすらも、漆黒の回廊のむこうまで響いていた。やっぱり、やめようかと思った。と理性さんが心のなかでいつてみるとまた、本能くんのブーリングである。

廊下のまがりかどでいつたんとなり、視覚と聴覚の入力ポートの感度を最大にする。病院にもやっぱり見回りとかあるもんなのだろうか？ けれどもぼくのセンサーはなにも拾わなかつたようなので、右折して進む。そして、表の道路に面した窓を見つけた。窓の前に立つと鍵をあけ、ぼくは枠に腕をかけてなんとか乗り越える。そとの地面にどたりと着地したとたん、猛然と走り出す。

ぼくは、病院を脱走してみた。

きみと出会いう、月夜の晩。

ぼくは途方にくれていた。いまさらになつて気づいてしまつたのだが、ぼくはあの病院が、町のいつたいどの位置にあつたのかを知らない。

いや、もしかすると隣町の病院だつたりするんぢやないのだろうか。気を失つたまま運ばれたのだから、わかるわけない。無我夢中で駆けた為にここがどこなのかもわからなくなつていて。病院に戻ることすら出来ない。パジャマ姿で突つ立つてゐるぼくがいた。

ぴいんと張り詰めた冷たさがぼくを冷静にさせると、からだの奥の方から轟々^{ヒヤヒヤ}と音を響かせながら、恐怖の烈火がせりあがつてきた。

こつなつてしまえば、もうあまり時間は残されていなかつた。恐怖がぼくをじりじり焦がし始めているのがわかる。このまま焼き尽くされてしまえば、ぼくは恐怖に耐えられず、パニックに陥つてしまはずだつた。

樂観的な状況ではなかつた。

日本トップレベル、つまり世界トップレベルのひきこもり生活によつて、ぼくの運動能力や、体力などといったものは極限まで削減され、そういうばさつきからなんだかふらふらするし、少し気を抜いたら嘔吐して黒い地面につづくまつてしまいそつなのだ。入院患者がタイム更新目指して全力疾走するべきではないといつことが判明した。しかし、そんなのは許されなかつた。こんな状態のまま野外で一晩明かしたら、ぼくは死んでしまう・・・。全身からどくどく流れ落ちる脂汗が炎を激しくさせるなか、ぼくは意識をはつきりとさせていなかつたが、それだけは確かに理解できた。ぼやけた景色をみまわしてみたが、光が灯つている建物はあらずもう深夜なのでしつかり戸締りがしてあるようだつた。息が上がつてゐる。きもち悪い。暗黒の景色が数秒に一度、くらりとぶれる。なにかにすがるように、闇の向こう側まで目線を馳せながらよろりぐらりと進んだ。つらかつた。泣き出してしまつた。だけど、ぼくを誰も助けることは出来ない。まわりには人つ子一人居なかつた。黄金色の月が、いつもと変わらずゆつたりとぼくの頭上に浮かんでいた。

月はなぜ、いつまでもぼくを助けることをしないのだ？ そつか、とぼくはあはは、とよれた笑い声をたてる。冥界の死の使いに、金色に輝きながらぼくがここにいると知らせているのか。ちくしょうめ。くやしい・・・。ぼくは死ぬのか？ だれも助けてくれない。ぼくは・・・。

ぼくは、こつかのことばを思い出す。

ぼくはひとりなんだ。

それはひとひらの、ちこちな、忘れかけられていた言の葉だつた。すると、どこからか優しく吹いた電腦の風が、ふわりとぼくを取り巻く。

強い意志をもつた風が、葉をのせて、ひらひらと舞い踊つてぼくのちつぽけながらだの全てを、あたたかい黒で包み込みながら、ひくるひゅるりと幾度も駆け、巡つた。

それらは、遠くとおい遙か彼方からやつてきた、ぼくことつて大切なもののたちだつた。

ぼくは思い出した。あの日々を。そうだ、ぼくはいつだつてひとりだつたじやないか。今回だつて、いつもと同じだ。なにも変わらない。ぼくの漆黒の力が、赤の炎を飲みこみながら恐怖を消し飛ばした。戦える・・・・・！ぼくのじこうが爆発するようにふくらんで、みなぎつた。

ぼくは孤独とたたかう戦士だ。孤独の戦士。電腦の、戦士だ。

・・・・ぬやすは、没落の王国。ちこちな世界のなかの王さまは、いまむくつと立ち上がつた。少年の、最後の戦いがはじまる。

少年の背後で円がうなづくように、きらりと輝いた。

ぼくは辿りついた。命のようなものを賭してめざした目的の地に、ぼくだけのちいさな世界へ。

魔城は月光を受け、光のないからだをさらりと黒々と染めながらそびえていた。その孤独の色をみつめると強烈な安堵感が湧き上がつた。

するところが形をなくし、ふわりとぐずれて全身に溶け渡る。とけだしたところは激しく渦巻く暗黒色だつた。ぼく的眼光は赤く、

からだからはぢす黒い紫の蒸氣が噴出してくる。ぼくの一呼吸ずつ
が闇を搖るがし、亀裂をいれる。

さつと誰もがぼくを責めるだらう。ぼくに怯え、蔑み軽蔑のまな
ざしをこゝそりと突き刺すのだ。でも大丈夫だ。ぼくはやつと氣づ
くことが出来た。もう、なにも捨てたりしない。

他人がどうとかじゃないんだ。自分のこころに強い芯を一本突き立
てておけばいい。ときどき重くて支えきれなくなつてしまいそうに
なるかもしない。懸命に一つの柱を支え続ける自分を孤独と感じ、
涙を落としそうになるときもあるんだろう。

目を閉じてみる。

たぶん自分は、いろんな覚悟がまだ足りなかつたんだ。孤独を演
じ、悲劇の主人公になりきり続けた。世界の全てを憎み敵にした。
その強大さに恐怖し、絶望の涙を幾度そのうつろな目に宿したこと
だらう。あのとき自分を好きになつてくれない世界なんて死んでし
まえと絶叫した声は、そこらじゅうに散らばりながら激しくぼくを
傷つけた。

違うよ、世界やぼくの周りのいろんな者たちは初めからぼくに興
味なんて無い。誰だつて自分のことで精一杯だつてのに自分を強く
みせようとしたりしてるんだ。世界がぼくを好きになるんじやなく
て、ぼくかぼくを好きになること、なんだかそれがとつても大切な
ことだつてわかつたんだ。

できるかなあ。このちつぽけで弱いこのぼく。

なにかを好きになることなんて出来るんだろうか。そんな、この
宇宙よりも果てしなく感じる、形のない不安げな何かをこんなぼく
が見つけられるのかな。だけどさ、なぜだか今なら、信じれたんだ。
さつと、できるわ。だつてぼくが世界で一番最初に愛するべきな
のは、このぼくなんだ。

さみしげな涙を浮かべたちつぽけなこのぼくなり、しつかりと抱き
しめて愛してあげられるだらう?

部屋へと入った。

表の通りには再び静寂がもどり、空氣も元の場所におさまった。いつのまにか世界は朝になつていて、そしていつしか季節も移り変わり、ぼくのただ一度だけの今年の春も、いっぱいの思い出を入れに残して、騒がしい夏空の影に去つていった。朝の空氣は、誰の思念や苦しみにも汚されていない清淨な透明で、生けるものの肺や心を優しく満たす。太陽の光とともに風が通りすぎる。香ばしい、夏の匂いだ。それは人々の痩せた心に、なんだかよくわからないけれどおもいきり笑いたくなるような高鳴りを与える。

闇が、ぼくをしゆるりとすばやく包んだ。ぼくの生きるべき場所がそこにあつた。強く、そう感じた。ぼくの小さな世界は、今でもあの時とままだった。

机に置き残されていたノートパソコンを撫ぜながら、ひきこもりの日々を思い出す。

おわり

僕の相棒のデスクトップには、左右に屹立した校舎の隙間から見える青く壮大な空があつた。ただそれだけの、ある少年の恋愛物語でした。しかしそれはここから始まり、これからも続していく。ああ、腹が鳴っているや。・・・

終章 「短編・電腦恋愛」（後書き）

自分で読んで見ても残念なほど拙い出来ですが、それがほほえましくもあるのです。

僕のほかの作品も読んで見てくださいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2559f/>

電腦恋愛

2010年12月28日14時28分発行